

言語と

コミュニケーション

竹内敬人編

言語とコミュニケーション ● 山本 鏡

——ギリシア哲学からの証言

視覚の発生と色彩語 ● 鳥居修晃

動物のコミュニケーション ● 青木 清

脳における言葉の座 ● 岩田 誠

自動翻訳 ● 野村浩郷

言語・エトワス・困家 ● 田中克彦

言語が消える時 ● 土田 滋

異文化間のコミュニケーション ● 般若蓮夫

世代間コミュニケーション ● 富永 健一

近代日本における輸人情報の「処理」 ● 大久保 泰南

——法律用語の場合一

意味論 ● 池上 嘉彦

——言語学の意味研究

詩の言語 ● 吉増剛造



東京大学出版会



シリーズ・人間と文化●1

言語と
コミュニケーション

竹内敬人編

東京大学出版会

執筆者紹介(執筆順)

- たけうち よし と
竹内敬人 (東京大学教養学部教授, 化学)
- やまもと たかし
山本巍 (東京大学教養学部助教授, 哲学)
- とりい しゅう こう
鳥居修 (東京大学教養学部教授, 心理学)
- あおき きよし
青木清 (上智大学生命科学研究所教授, 神経行動学)
- いわた まこと
岩田誠 (東京大学医学部附属脳研究施設助教授, 神経内科学)
- のむら ひろ まと
野村浩郷 (NTT 基礎研究所, 計算言語学)
- たなか ひこ
田中克彦 (一橋大学社会学部教授, 言語学・モンゴル学)
- つちだ しげる
土田滋 (東京大学文学部助教授, 言語学・オーストロネシア諸語)
- ふなび たけ お
船尾建夫 (東京大学教養学部助教授, 文化人類学)
- とみなが なが いち
富永健一 (東京大学文学部教授, 社会学)
- おおくぼ やす お
大久保泰甫 (名古屋大学法学部教授, 法制史)
- いけがみ よし ひこ
池上嘉彦 (東京大学教養学部教授, 言語学)
- よし増 ぞう
吉増剛造 (多摩美術大学講師, 詩人)

シリーズ・人間と文化 1 言語とコミュニケーション

1988年1月30日初版

[検印廃止]

編者 たけうちよしと
竹内敬人◎

発行所 財団法人 東京大学出版会

代表者 菅野卓雄

113 東京都文京区本郷 7-3-1 東大構内
電話 (811) 8814・振替東京 6-59964

印刷所 大日本法令印刷株式会社
製本所 有限会社島崎製本

ISBN 4-13-001017-4

本書は昭和六十一年夏学期に、東京大学経済学部で行われた「総合科目（一般教育）」の十二人の講師による十二回の講義の講義録を、各講師が手を入れて纏めた論文十二編からなる。

この科目が本来駒場（つまり、学生が一、二年生の時）で履修すべき一般教養科目の一部でもあることから、総合科目の企画は、教養学部第二（教務）委員会の下部組織である総合科目小委員会に委ねられている。私は昭和六十年より、すなわち昭和六十一年度分の企画から、この小委員会の世話をやらせて頂いている。企画は何回かの委員会の席での討議や調査に基づいて行われた。なお六十年年度総合科目小委員会のメンバーは以下の通りである（敬称略）。

岡野 行秀（経済）

竹内 啓（経済）

蓮見 重彦（教養）

木村尚三郎（教養）

竹内 敬人（教養）

村上陽一郎（教養）

島田 太郎（教養）

長尾 竜一（教養）

山本 巍（教養）

それにしても、この総合科目だけではなく、この種のオムニバス形式の講義を企画するのは大変で

ある。この総合科目は「東京大学公開講座」と違って、単位になる正規の講義なので、単に学生の興味をひくだろう、あるいは話題として新鮮だろう、という視点だけでは、講義のテーマと出来ない。それなりに、一つの体系になるような構成を考えなければならぬ。反面、大変楽しい仕事でもある。まず基本テーマを設定し、そのテーマの枠の中で、一応万遍なく広く、色々な分野をカバーする二四のトピックを選び、そのトピックにピッタリの講師を探し、依頼し、日時を調整し……と言った手順である。言ってみれば、あれこれ手直ししながら設計図を引いた家の建築が、次第に進み、ついに落成に至るのを見る喜びに似ていよう。

この種の総合講座の一般的な狙いは、いわゆる「学際」的な視点を学生に教えることになる。ただ、これは「言うは易く、行ふは難い」ことである。ある学問を研究していく過程で、どうしてもその学問の伝統的な枠を踏み越えざるを得なくなり、隣接した領域に研究の幅を延ばしていくうちにその領域の研究者や研究テーマと、馴染みが出来、その分野にまたがって研究するようになる、と言った自発的な過程があつて初めて「学際」的な研究が始まる。そこでこの総合コースの構成においても、講義を聞くだけ、という受身の立場では「学際」的にはなり得ない。全体として一つの結論を出す、と言つたことは特に考えなかつた。狙つたことは、現代に生きる学生が、どうしても意識しなくてはならないいくつかの基本概念を一年間の講義を通して、色々な角度から分析して見せ、学生が各々の個性や志向にあつたものを汲み取る事を期待する、と言う方式をとつた。

学内、学外の超一流講師を集めて一つのテーマでお話頂くこの総合科目が少数の学生の耳に達する

だけで終わるのは、いかにも残念である。この我々の気持ちは、幸いにして東京大学出版会の賛同により「東京大学教養講座」と言う名のシリーズでこの講座の講義録が刊行されることになって実現されていた。六十一年度分からは「人間と文化」と言うタイトルのもとに刊行されることになったが、出版事情の厳しい折から、充実にしているが、地味な企画を取り上げてくださった東京大学出版会、特に直接編集に当たられた小池美樹彦氏に感謝する。

ご多忙にもかかわらず、ご出講、ご執筆を賜った講師の先生がたにも、改めてお礼を申し上げたい。また、企画、実施の縁の下の力持ちをしてくださった、教養、経済両学部の教務課職員の方々にも感謝したい。

なお、本書を含めて昭和六十一年度分の二冊は「言語・情報・コミュニケーション」関係、昭和六十二年度分の二冊は、「心」の諸問題、昭和六十三年度分の二冊は「未来予測」を扱う。本書と併せて御愛読いただきたい。

昭和六十二年十二月

竹内 敬人

目次

まえがき——i

言語とコミュニケーション 山本 巍——1

——ギリシア哲学からの証言——

視覚の発生と色彩語 鳥居修晃——25

動物のコミュニケーション 青木 清——51

脳における言葉の座 岩田 誠——69

自動翻訳 野村浩郷——89

言語・エトノス・国家 田中克彦——109

言語が消える時 土田 滋——129

異文化間のコミュニケーション 船曳建夫——153

世代間コミュニケーション 富永健一——173

近代日本における輸入情報の「処理」 大久保泰甫——193

——法律用語の場合——

意味論 池上嘉彦——215

——言語学の意味研究——

詩の言語 吉増剛造——233

言語とコミュニケーション

山本 巍

—ギリシア哲学からの証言—

1

人間は言葉なしで生きていける。少なくとも明らかな形で言葉を話すことなしで生きていける。朝目覚めて顔を洗い、食事をして外出する。人の流れを泳いで店に入り、日用品を二、三買って映画館に向かう。映画を見て帰宅する。その間私は身振り、手振り、動作以外に自分から一言も言葉を発語することなく、一日の生活を送ることができる。平凡と言えば平凡な、しかしごく当り前の日常生活がそこにある。特に誰とも言葉を交わそうとしない離人症の人でも生きて行けるし、現に生きているそれは、われわれの日常生活が、事々しく事(言)改めて語るまでもない堅固な基盤の上に成り立っているからである。「風呂、飯、寝る」の三語だけで成り立つ家庭生活もかつてはあった。そうした家庭生活の方が、夫婦の会話、親子の対話の豊かな家庭生活よりも脆いかどうかは速断できない。家庭

争議があれば、家庭内の話し合いの不足とその必要性をしたり顔で声高に指摘する識者が多いが、話し合えば済むということでもあるまい。話し合えば合うほど、ますます傷口を広げ、家族関係はぎくしゃくしたものになりかねない。家庭内の対話は、家庭生活を背景、基盤としてこそ対話である。基盤である家庭生活が、格別意識されたり、注目されて語られたりすることがない自然な背景であつてこそ、そこでの対話もスムーズで生き生きしたものでありうる。もしも対話が、その基盤である家庭生活そのものを維持したり、強化したりする為のものとなつたら先後倒逆であり、それは既に自然な家庭生活のきしみ、ほころびの印である。(朝な夕なに「I love you」と言わなければならないどこかの国の家庭生活は、それだけ緊張に満ちたものであろう。たとえ「I love you」と「言う」ことが愛することそのもの一部を遂行する言語行為であるにしても。)それは、言語の基盤の一部である文法をわれわれが特に意識しない時にこそ自由に言葉を操ることができ、その反対に、われわれが外国語を話そうとする時、一つ一つの文法が気になつて口がしびれて思うようには話せない苦しい思いをさせられることに対応している。(ソクラテスの対話については後述する。)

少し話を急ぎ過ぎたようであるが、ここでは次のことに注目することで十分としよう。われわれ人間は、平凡な事実ながら、ごく当り前の日々の生活を送っている。ここでは特に話をしなくとも生きていける。むしろ言葉を発し、話し合うのは、われわれが日常の生活(家庭生活はその一部)を共有し、これを基盤とも背景ともして初めて意味がある。われわれは当り前の日常生活を特に意識することもなく共有している限りでは、人間は「馴れ合う」存在であり、日々馴れ合つて生きているものである。

だから敢えて言葉を語ることもなく安心して生活できるのである。店で品物をキャッシャーに見せ、金を払う。彼女からおつりを受け取る。このあいだにわたしも彼女も一言も発しなくともかまわない。たとえその為には彼女が無愛想に見えるにしても。ここには安定した、馴れ合った振舞いがあるのである。そしてそれはわれわれの日常生活のごく普通の一コマである。

ところでしかし、人間はただ生きる、生活する、だけではない。人間は言葉を話す存在である。更に言葉について考える、言葉について語るものである。そしてわれわれが言葉を語るのは、語る必要があるからであり、それだけ語ることに意味があるからである。そして語る必要、語る意味は、その根本において、人と人の間には両者を隔てる距離があり、君とわたしは異なる個人である事実根ざしている。まことに人間とは人と人を隔てる「間」ある存在である。「風呂、飯、寝る」の三語からなる家庭生活にあっても、相手が今希望しているのは風呂なのか、飯なのか、それとも寝ることなのかは、言ってくれなければ分からない。君の希望すること、考えることがわたしに透明になっていれば、つまり君の「こころ」のことがわたしに透明に見えていれば、君にとってわたしに語る必要がない。語って見たところで新しく聞くに値する内容がある訳ではない。それは意味のない雑音に似ている。例えばコップの水に氷を浮べた時、氷がまだ解けないで氷と水の区別がある場合（熱力学的に言えば、エントロピーが低位の場合）には、そのコップの中味について語るべきことがある。氷は語るにふさわしい、質的に差異のある「情報」を含んでいる。氷が溶けてコップの中味が一樣に水準化されて水になってしまえば、コップ一杯の水がある、という以上の語るべき情報は最早コップの中にはな

い。そのように人と人の間に語るに足りる情報の交換（コミュニケーション）が成立する為には、その人と人の間に不透明な質的差異がなければならぬ。話し手が何を感じ、何をどんな視点から見、何を考え、何を希望しているか、など、つまり話し手の「こころ」のことが聞き手に見えない、不透明である、ということが話し手と聞き手の間の情報交流、コミュニケーションの為の前提である。それは、話し手が話し手自身の創造的な言語活動によって「自分の言葉」を生み語り出すことができ、聞き手とは全く異なる独自で自由な言語主体であることを承認することに他ならない。そうしてこそ話し手（あるいは書き手）の発言は、独自で自由な今一つの言語主体である聞き手（あるいは読み手）に何か不確かなこと、新しいこと、予期しないことを含むことになり、聞き手の知識に何かの変化を加える情報交流が可能になるのである。話し手と聞き手の双方に透明であったり、自明であることは事（言）改めて言挙げする必要はない。熱力学風に言えば、エントロピーとはここでは、話し手からの情報を受けとる聞き手が、その情報を受け取るまでその情報について知らないことの尺度である。

今誰かが「ヘテマラニコトロン」と言ったとしよう。わたしには不透明で知られていないことが語られたのである。彼は確かに自分の自由で創造的な言語活動によって「自分の言葉」を語ったのであろう。しかしその言葉はわたしには何の情報伝達の言葉としても働かない。その時の彼とわたしの間にはあまりに異なりすぎ、その言葉はあまりに自由すぎ、あまりに不透明すぎる。そうやってよければ、彼とわたしの間の知識の落差が大きすぎる。こうして、双方に知識の落差がなければ、言葉を語ることは必要がないし、語ってみたいところで格別意味のない雑音にすぎないが、落差がありすぎては再び

一転して何の言葉かさっぱり分からない雑音にも等しいことになってしまう。彼の「ヘテマラニコトロン」はチンパンジーがでたらめにタイプライターを打った文のようなものに聞こえる。(因みに、もしも一兆匹の猿が一秒間に一〇個のキーを叩いたとして、「To be or not to be: that is the question.」という文を生み出すには、宇宙が生れてこの方今までにたった時間の一兆倍以上かかる、という計算がある。)

言葉が伝達言語であるには、話し手と聞き手の間に何かの共通理解が下敷きになっていなければならない。今の場合それは少なくともそこで使用される言語の了解である。それは語のつづり方、変形の仕方、語の配列の仕方、どういう語とどういう語が結び付くかという結合の仕方、そして広いいみでの語の意味と使用法、などである。わたしとの間にこうした共通理解がない彼の「ヘテマラニコトロン」はわたしには単に雑音か、せいぜいわたしが全く知らない外国語か、異星人の異語として響くだけである。もしわたしと彼の間にその記号の配列の規則の知識が共通であれば、その時はある暗号として解読できる伝達情報であったろう。しかしわれわれ以外の人々には相変わらず雑音にすぎない。ピュタゴラス教団の中では「偶数は女性数である」と言われていたらしい。しかし教団以外のわれわれにはそれは何のことか分からない。男性、女性という性の言葉は生き物にこそ結び付く、ということがわれわれの普通の了解だからである。あるいはまたある人が「紫色に輝く数五」と言った(書いた)としても即座にはそれは聞き手(読み手)には不可解であって、伝達内容はゼロであろう。色彩語がどういふものと結び付きうるか、という聞き手の側の通常の推測の範囲を踏み越えているからである。詩は元より言葉の自由を生きるものである。詩人はその自由な言語空間の中で、おのれ独り

の「このころの思い」をこめた「自分の言葉」を創造するであろう。そのかぎり詩的言語は私的言語の性格を帯びている。(それは、「私」のきままな言葉ということではない。むしろ極度に緊張をたたえて構築された言語である。誰でも、またいつでも作詩できる訳ではないことがこれを示している。)そして詩は情報伝達を本分にしたものでないけれども、伝達言語の立場から見れば、詩の作者の自由度が高まれば高まるほど読者の無理解、誤解そして無視の可能性もまた高まるとは言えよう。それは詩が支払われなければならない代償である。

言語による伝達、コミュニケーションが可能である為には、話し手と聞き手が言語使用の知識をある程度共有しているというだけではない。「チャレンジャーが爆発した」という発言が伝わるには、「チャレンジャー」がある宇宙船を指示するという経験的知識も共有していなければならない。それが聞き手の側になれば、「チャレンジャー」というのはアメリカのスペースシャトルだけでも」と説明してやらなければならない。また子供が物理学者からいきなり最新の素粒子理論を聞かされても、それは「ヘテマラニコトロン」と大差あるまい。その話が子供に有効に伝わるにはある程度の物理学の知識が素養としてなければならぬ。民族や世代を異にする者の間のコミュニケーションがスムーズにいきにくいのも、習慣、制度、伝統、文化といった、物の見方、考え方という背景を話し手と聞き手が共有することがそれだけ少ないことによる。「鯨を殺すな」という反捕鯨団体の発言が多くの日本人に不透明で「的外れ」なものに聞こえるのも文化的背景の差異に根ざしている。そして公共的学識に当たるギリシア語の「マテマ」が数学 (mathematics) に收容された事実に見る通り、文化的

背景を引きずることがもつとも少なく、それだけ誰にでも了解される分野が数と位置と運動量の世界である自然科学であり、科学言語が情報伝達の、そして誰にでも分かる理想言語と想定されたりするのである。(アメリカの大学での講義の間に口にした英語は、ただ“therefore”の一語であった高名な日本数学者もいる。)科学言語の成り立ち、有効性と限界についてはこれ以上触れない。

しかし言語による交流の為の必要十分条件を枚挙しようとするのがここでの目的ではない。「言語とコミュニケーション」を巡って素描した以上の吟味を通して、人間存在そのものの考察の通路を見通すことを目的としている。人と人との間に何の隔壁もなく、話し手の思っていることが聞き手に透明に見えていれば(従って両者にとって明白、自明のことは)語る必要がないし、語ってもいみがない。話し手と聞き手は各々独自の視点を持つ異なる言語主体であり、双方の間に不透明な距離と知識の落差があつてこそ語ることは有効である。しかしその距離と落差があまりに大きすぎ、話し手と聞き手がある程度の了解を背景として共有することがなければ、また話し合い、交流することも足元から瓦解する。これが先の素描からえられたことである。そしてそれは、人間が人々の内に生れ落ち、人々と多くの物を共有し、人々と共に生活し、人々の間で死ぬ、人の「間」なる共同存在というレヴェルと、人は独りで生れ、人との「間」を不透明な隔壁で隔てられ、己れ独りの生を生き、己れ独りの死を死ぬ以外にない個なる存在のレヴェル、を示唆している。

人は誰も生まれようと望んで生まれたのではない。大学へ行くか行かないかの二つの進路に直面するような形で、生まれるか生まれぬかの二つの可能性を目の前に据え置いて、しかる後に生まれることを選んで生まれた人は一人もいない。気が付いた時には特定の男女を親に、特定の時に特定の場所で作られていたのである。生み落されたといつてよい。そしてわたしがそこに生み落された世界は、多くの人々の棲んでいる世界である。その誕生の時から、人々の間で生きながら、人々の中で生きる術を身につける、二〇年余りにも及ぶ長い鍛練と学習の期間が始まるのである。無論この世界は人間だけを含むのではない。あらゆる種類の植物、動物、鉱物といった自然の「物」と無数ともいえる人工の「物」を含んでいる。こうした物たちは何よりも一つずつの個体、そのいみで物個体である。そして人間も一人一人が個体であり、その集合体、共同体が人々である。その共同体は、「わたし」を内に含んでいるいみで「われわれ」と呼んでよい。

わたしはある時ある場所で生まれ落ちることで、その「われわれ」の一員に加わり、「山本巍」という固有名詞を持つ特定の個人として生きはじめたが、わたしが生まれるはるか以前から「われわれ」の世界は存在し続けてきたのである。過去のあらゆる記憶、あらゆる記録を植え付けられて世界は五分前に突如として始まった（のかも知れない）、ということは特殊人種たる哲学者が頭の中で、あるいは「こころ」の中で考えることであって、当り前の日々の生活を送り、普通に生きている「われわれ」

が考えることではない。「われわれ」人間はわたしの誕生以前の大昔から世代交代を繰り返しながら生きてきたし、「われわれ」の世界ははるか以前から存在しつづけてきた。

わたしは「われわれ」の一員として日々生きているが、未来のある時に（いつかは知らないながら）確実に死ぬことを知っている。その時山本巍という特定の個人が世界の内から消失し、「われわれ」の人口が確実に一名減るが、世界は相変わらず世界である。もしそうでなければ生命保険会社は「われわれ」の社会の中で存立の可能性も意義ももたないことになる。自分の死とともに世界が自分の家族もろとも消滅する、と思うなら人は誰も生命保険などかけはしないからである。わたしの死によってわたし一人が消失し、世界は寸毫も変化を見せず、人々は相変わらず日々生きていくことである。第三次世界大戦によって全人類絶滅の可能性はあるにしても。

世界は無限とも思えるほど極みなくひろがっている。かつて宇宙の無限大を前にしてパスカルは恐れ戦いたが、それはパスカル一人のものではない。「われわれ」の誰にとっても同じである。そのようにわたしの誕生と死は、世界の中に起こる小さな出来事であり、「われわれ」の歴史の中の一コマに過ぎない。ここでわたしは「われわれ」の中のただの一員であり、いかなる特権もなければ、いかなる特殊な身分を誇ることも確実に無意味である。

その「われわれ」が当り前の日常生活をしながら生きている時、「問わず語らず」日々接触し、各種各様の交渉をしているのが様々の物個体である。メガネをかける、服を着る、椅子に座ってテーブルに向かう、箸を使って茶碗の飯を食べる、テレビを見る、家族と話をする、靴をはく、車を避け